

阿呆よ——云ふたれ」云ふたる段々面白なつてきた、コラ其位ひ丈が高うて、まだ高うなりたいか、入日の影法師、半鐘盗人、燈明臺の油注し、獨活の太木、ヒヨロ長、ノツポー阿呆よ、よ……」お前の方が餘程阿呆やがな、此度宜い奴教へてやろう、アノ後から頭をガシ／＼搔いてる奴がある、頭が痒いのやない、襦袢の袖口が赤い、それが見せたいばつかりに、頭を搔いて能るね、云ふたれ、頭をガシ／＼搔くな頭が禿るで、頭が痒い事無い襦袢の袖口が見せたいのやる、其位い見せたい襦袢ならクルーとぬいで竹の先へく／＼りつけて、是れは私の襦袢で御座りますと、野崎の觀音さんまで見せつけて歩けと云ふたれ」よつしや、云ふたる、コラ頭ガシ／＼搔いて行く奴……」イヨイ俺かなア」頭ガシ／＼搔くな、頭が禿げるで、赤い襦袢の袖が見せたいのやる、其くらい見せたい襦袢ならクルツと脱いでしもうて、竹の先へく／＼りつけて是は私の襦袢で御座りますと、せいだいじばんして歩け」コレせうむない二輪加をしないなア」イヨイ船の中の大将、有が因果で着てますね、あんたも有なら着ておいなはれ」へエーそら私しおまへん」阿呆、有るちうたれ」有るぞう——」有りやア何で着てこんね」有つたけれども質に置いた」そんな事を云ふたら負けやがなア」質に置けへんぞう」質に置かんのなら着てこんかへ」今日來しなに、紙屑屋に賣つた」阿呆、よけいあかんがなア、喧嘩は負けどうしや……」ワア／＼云ふて居ります所へ遣つて來ましたは稽古屋の連中、屋形船で三味線太鼓を入れて、其賑やかな事、オイ……（此處でふけ川と云ふ鳴物が遣入る）「イヨウ……エロをドンチヤン／＼いわしてなはるな、此處々天氣に障子を締切つて、世間へ顔出しの出來ぬ奴ばつかりと、見えるなア、身代限りの寄合か燈の散會か、それとも唐人の散財で、唐さわぎやろ……」モシ此好い天

氣に障子を締切て有るかさかいに、堤の上を通つて居る奴が、冷かしてますがな、身代限りの寄合か、燈の散會か、唐人の散財で唐さわぎや云ふてますせエ」ホンにえ、事を云ひよる」モシ感心をして居るのやおまへんでエ、障子を明けなはれ」障子を開ける」イヤウー仰山乗つてけつかるなア、傳法の施餓鬼と間違ふて居るのやろう」ヤイコラ……堤の上の飛脚詣り、尻からげして尻から風を引いて死にやがれエ」何を吐してけつかる燈め」コラ燈やないわい、ちやんと此通り足は揃ふて有る、其の上おあしと云ふ物がたアンと有つてそれが減らしたさに、斯うして船で、花アので詣るのや、汝等みたいにブラ／＼堤の上を歩かんと樂々と詣れ、コラ口惜しけりやア此處へ出て來い、海老の頭で爛冷しを一盃飲して遣るか」頼桁の達者な餓鬼やなア、汝れが海老の頭で爛冷しを飲んで、けつかるくせに」何を吐かしてけつかる阿呆ンだらめが、コラ見て見い、中には食ひ物で詰つて居るのや、憚りながら酒は樽が二挺もあつて、其の上に肴がウンと揃ふてある、造りに焼いた物に酢の物此の通りや、見てびつくりしやがんな、目の正月をさしたるさかいに」何を吐かしやがるね、鯛の焼物なんて大き顔をやるない、其の鯛かて鎌倉山で三浦荒次郎やらう、芝居の船で片身片側やらう」ほんまに口の達者な餓鬼やなア、鎌倉山で三浦荒次郎、芝居の船で片身片側やて——ホンマに片身片側やがな、モシ雅墨さんあんただつしやらう、此鯛は看板やさかいに、住の道へ着くまでは手をついたらいかんと、云ふてあるのに、あんたが、ばり／＼食ふてしまふて、鯛の目玉食ふて中へ紙をつつこんだりして、汚いかなする事が、兩方あるやうに見せんと、此喧嘩は負けや、サア退きなはれ、私が兩方あるやうに見せてやる……コラ大きい鯛やろがな、片身片側やあらへんで、見てエよ、ソラこつちやに身がある